知事広聴「平太さんと語ろう」　記録

【開催日時】平成 24 年 11 月 20 日（火）
13 時 30 分～15 時 30 分
【会　　場】静岡県総合健康センター　ホール

１　出席者

・　発言者　三島市及び函南町においてさまざまな分野で活躍されている方
６名（男性３名、女性３名）

・　傍聴者　１３４人

２　発言意見

	項　　目	頁数
発言者１	三島バルを通じた地域の魅力発信	3
2	エコファーマーの組織化 農業賞の創設	5
3	子育てサークルの活動	10
4	三島夏まつり子供しゃぎりの運営	12
5	空き地を利用した音楽活動の紹介	19
6	公共施設運営の紹介と課題	21
1	仕事面での交流人口の増加	25
傍聴者１	静岡県総合健康センターの活用方法の提案	28
2	富士山の世界遺産登録後の活用方法	29
3	住民投票条例の制定	29

＜知事挨拶＞

皆様、こんにちは。

今日は誠に美しい日となりまして、「ここちよく晴れたる秋の青空にいよいよはゆる富士の白雪」、これは大正天皇の御製です。非常にそのようなぴったりの美しい日になりまして、今日は富士山に見守られてこちらの方に参りました。

今日はこの広聴会、広く皆様方のお話を聴くという、県の方からは広報を出しますが、皆様方から広く聴くという広聴会でございまして、函南、そして三島の皆様方を中心に、今日は三島の市長様、また函南の町長様、それからこの地域から出ておられる県議会の先生を始め、大変楽しみにして参りました。

この広聴会、今年度でもう７回目になります。今回は移動知事室というのを今年度から始めておりまして、昨年度の１月にウォーミングアップで富士で始めたのですが、それを入れますと６回目と、やっぱり静岡県は広うございますので、なかなか皆様方とお目にかかれる機会というのも限られるということでございます。

それで私の方で出かけるというふうにいたしまして、各地にお邪魔をするわけですけれども、やはり伊豆半島の賀茂地域に行くとか、あるいは遠州ですと北の方、天竜の水窪あたりへ行くとか、あるいは井川の奥の方に行くとなりますと、もう１日がかりで、そして現地に留まる時間は限られるということがございますので、それを克服するために、いわゆる公式訪問というのはもう 1,000 回余りになっているのですけれども、もう少しそれを充実させるということで、今、知事室は静岡市にはありませんで、沼津総合庁舎の東部地域政策局長の机が知事机になっておりまして、今日、明日、明後日とそこをベースにして、こちらで静岡県の仕事をさせていただくというそういう段取りになっております。したがって、朝早く、また夜遅くまでこちらの人たちと大いに語るということでございます。

今日は静岡市の方から出てまいりましたけれども、まずは庁舎で幹部の方たちとお話をいたしまして、その後、この 11 月 25 日だったでしょうか、にオープンする三島の青果市場、すばらしいですね。行かれましたか。あれを見ないでは箱根西麓のこの新鮮なおいしいお野菜を、今三島市の駅前であったわけですけれども、今度は散髪する前と後ぐらいに違った感じで、もう富士山は見えるし、眼下に駿河湾は見えるし最高のところですね。そこに間もなく移るというそこを見てまいりまして、帰りには伊豆のフルーツパークというのも、これは来年の 1 月 19 日にオープンするということで、今駐車場の工事をされておりましたけれども、ここがいわば食文化のエッセンスになるんだというふうな印象を強く持

った次第でございます。

何しろ首都圏をすぐそばに抱えて、そして日帰りもできるし、今は新東名もできまして、半年で2,400万の人たちがＳＡ、ＰＡに食材を求めてこられていると、大変な数です。2,400万と一言で言いましたけれども、年間 2,500 万人の人が行ったということで大騒ぎになったのがディズニーランドです。１年です。半年でＳＡ、ＰＡに食材を求めに来られているわけです。だからすべての記録を塗り替えているわけですが、これも本当ならば来年の夏に開通する予定だったんですけれども、前倒しで人知れずこっそりと開通したのが４月 14 日、口コミで広がって「食の都大路」と言っていますね。

そういう入り口に当たりまして、玄関口に当たりまして、今日はここでこちらのリーダーとして活躍されておられる三島並びに函南の方々のお話をじっくり承りまして、もし時間があればフロアーの方とも意見交換させていただくということを望んでおります。何とぞよろしくお願いを申し上げます。

＜発言者１＞

私は株式会社を立ち上げて、その中の事業を通じて地域に貢献できるような、食を中心としたコミュニティを作れないかということで立ち上げました。ＮＰＯという形ではなくて株式会社という形でそういった事業をしながら、地域にとっても良いような事業をしていきたいということで 2011 年の３月に起業をいたしました。

ちょっと自分の出身が出てしまうのですが、東京都出身で、実は三島市は母の実家ということで、７年前にこちらに移住いたしまして、そのときは母が開業いたしましたおにぎりカフェをやってくれということで、そのカフェをやるために東京からこちらに移住いたしました。それで７年間、その食に関係深いおにぎりカフェを経営した後に自分で起業して、今現在に至っているという感じになっております。

先ほどちょっとお話にもありましたけれども、三島バルという地域の飲食店、そして個店の皆様と協力し合いながら、地域のいいお店を知ってもらいながら、まち歩きをしながら三島のいいところを発見しちゃおうというイベントをやらしていただいております。

バル自体は 2011 年の 10 月に第１回を、そして 2012 年５月に第２回、そして 2012 年 10 月 13 日、つい先日の 10 月 13 日に第３回を開催いたしまして、第３回につきましては地域のお店 100 店舗に参加いただきまして、参加者の皆様も 2,500 人から 3,000 人ぐらいの方に参加いただいて、まち歩きをしながら地域のいいお店を知っていただけたという感じに

なっております。

こちらのバルという私自身が異色の飲食店をやった経験から、そしてバルというこの地域のイベントを通じて、今まちづくり広域ネットワークという県の中でもバルイベントが多く開催されていまして、そういった皆様との広域の連携もしながら、よりそのバルイベント、地域の魅力を発信するというような事業を株式会社という形で展開しております。

今回こういう機会で静岡県に対して、知事に対してお話を伺えるということでしたので、私自身がよそから来て、この街で起業をしたという、起業してまだ１年ちょっとなので、まだまだ事業としては未熟な部分もあるのですけれども、そういった中で感じた部分でお話をさせていただければと思っております。

私自身、この三島市がいいということで、ここの街で起業したいというふうに思ったのですけれども、これから多分いろんな市町で人口が減ってくるという問題がすぐ目前にあるというふうに思っておりまして、私自身も地域の活動にバル以外でも商工会議所や、あとは法人会の青年部といった活動にも入らせていただいて、多くの先輩方からこの街をどうにかしなきゃいけないよねなんていうお話をいただいております。

私自身もそういった中で地域の活動にいろいろ入らせていただいているのですけれども、多くの方からお話を聞いた中で、徐々に人が減ってくるという問題ですとか、やっぱりこの街をどうにかしなきゃいけないけれども、どうしたらいいかみたいな話を繰り返し議論したりしています。

そんな中で、これからより地域間の競争というのが激しくなってくるという話が出ていまして、いかに人材をこの市町に集めなくてはいけないか。そして税収を増やしていかないと街自体が落ち込んでしまうのではないかといったような話が出ています。

そういった中で、個別に計画が必要になってくるのではと思いまして、例えば移住してくれる人、私みたいな外から来て移住する人とか、あとは中で雇用があったり、企業さんが入ってきてもらったりしながら、市の人口を増やしていかなきゃという話があったりするのですけれども、その民間の中でどれだけできるかという話もあったりする中で、各市町でそれぞれいろんな政策とか、先日もちょっと佐賀県の武雄市の市長からお話を伺う機会もありまして、そういった中でよりその各市、各町で魅力的な政策というか、この街で仕事をしたいとか、この街に住みたいななんていう、そういう性格が、より特徴のある性格みたいなものが必要になってくるという話が、その講演会の後に出たりもしました。

そういったものを通じて、静岡県として、先ほど県知事も食のまち、都ということでお

話をされていた部分もあるとは思うのですけれども、県として逆にそういう全国から静岡県がいいよというふうに選んできてもらう人をどういうふうに集めたらいいのかなというのを、もしお考えの中であれば伺ってみたいなというのと、あとはそういう各市町で、これから街間でより競争も強くなってくるであろう中で、その各市町に対して県からどういうふうに考えるとか、あとはこういうふうにという思いがあれば、ちょっと伺っていければうれしいかなというふうに思っております。

＜発言者２＞

農業の方で少し専門的な話になって申しわけないのですけれども、少しお付き合いください。私は今経営の柱になっております小松菜を１年中作っております。出荷先は二十数店舗を有する地元のスーパーに直接納入しております。そのほかに60種類を超える野菜を作っておりまして、クレマチスの丘のプリマヴェーラを始めとして、静岡県内、東京、神奈川のレストラン、ホテルに野菜を直接納入しております。それから先ほどの小松菜ですけれども、スーパーと、それから学校給食に今三島市内の５つの小中学校に直接納入しております。

私の経営理念は「安全安心は当たり前、おいしい野菜でなければ野菜でない。これからの農業は消費者に理解されなければ成り立たない」です。大変なこともたくさんあるんですけど、家族３人と、パートさん５人、計８人で毎日楽しく農業をしております。

私は今静岡県知事の認定されたものを２つ持っており、これを全面に出して野菜を作っております。１つは静岡県農業経営士という称号です。経営士の仲間とよく話をするんですが、皆愚痴を言ったり、農業のことで人のせいにする、こういうことは一切言いません。すべて自分の責任として受け入れて、積極果敢に農業をしております。農業はこうあるべきだと僕は思います。

今ＴＰＰやスーパーの安売り競争などで農業を取り巻く環境というのは不安なもの、それから厳しいもの、たくさんありますが、静岡の農業は内外の競争に打ち勝つ高い品質や高度な技術を十分持っていると思います。補助金に頼る農業や保護される農業でなく、足腰の強い、内外の競争に打ち勝つ、県としての農業の施策を作っていただきたいと思います。

それからもう１つは静岡県認定のエコファーマーです。農薬や化学肥料を減らして、環境に優しい農作物を作っているということで与えられる認定ですが、今県知事の名前が記

された認定書をいただいているものの、県からのフォローやバックアップが全くありません。農業の認証制度ではエコファーマーというのは一番初歩の制度で、少し工夫をすれば誰でもいただけるものです。県の東部とか中部、西部、各農林事務所単位ぐらいでエコファーマーの組織を創っていただいて、研修会や相互の交流会などを行って、安全安心な農作物づくりのフォロー、バックアップをしていただきたいと思います。

それから終わりに知事に１つ提案したいものがあるのですけど、農業関連の表彰で日本農業賞など、全国規模のものは大規模経営や大きな法人組織にしか与えられません。国内の農業を支えているのは、戸数からいっても中規模、小規模の農家です。これは県内でも同じものと思います。大規模経営や大きな法人組織の表彰は国に任せておいて、いかがでしょうか、中規模、小規模農家でもユニークな工夫を凝らした経営や、地域の模範になっている、また地域に貢献している静岡らしい農家に、例えば「静岡県農業賞」、あるいは「ふじのくに農業賞」を与えるというものを創っていただけないでしょうか。いただいた農家は励みや誇りにもなると思いますし、さらなる発展も期待できると思います。

全国一をたくさん持っている静岡としても、内外へのさらなるアピールになると思います。地域や業種のバランスを考えての表彰でなく、身近であって権威のある実力主義の賞であってほしいものです。例えば今年度は該当者なしということでもいいと思います。

先日こんなことを全国を駆け回っている農業ジャーナリストの方に伺ったところ、全国の都道府県では、まずこういった取り組みをしている都道府県はないのではないかということでした。ぜひ御検討していただきたく思います。

＜発言者１、発言者２に対する知事のコメント＞

発言者１さんと発言者２さんの方から食と農業にかかわるお話を大変興味深くお聞きいたしました。

まず発言者１さんはお母様のお手伝いで来られて、そして自ら起業をやってみたと、おめでとうございました。そして仲間を募って三島バルですか、それで食べ歩きというのはいいですね。やはりどこにどういうものがあるかということを地域のそうした食品関係というか、飲食関係の方たちがお互いに知り合うということは、まず最初にすべきことだと思いますし、なかなかしかし言い得て、そう簡単にできることではないというふうに思いますが、今回第３回目で 100 店舗が参加して 2,500 人、3,000 人の人たちが来られたということで、大変短期的にすばらしい成果を上げておられるというふうに存じます。

御心配の人口減少ですが、特に三島市は合計特殊出生率というのがあるんですが、女性が一生の間に何人お子様を産まれるかというそれを 2.07 人、つまり 2,3 人１家庭にありますと人口減らないんですけれども、ところが三島市は低いんですよ。1.36 人ということで、県は 1.44 人ですので、それより低いと。不思議ですね、こんなにいいところなのに。というふうに思うぐらい、ちなみに函南町は静岡県の平均と一緒です。1.44 人ということはだんだん減っていくということなんですね。2,3 人でないとだめなので、ですから３年前は人口 380 万人と言っていました。今 373 万人しかいません。間もなく 360 数万人になると思いますね。だから富士山をだんだん宝永山の方に、宝永山で食い止めなくちゃいけないということで、そういう御心配を発言者１さんのような若い方にしていただいて、大変僕たちとしても励みになっております。

それどうしたらいいかということですが、絶対人口というものがありますと同時に、こういうところにたくさんお越しになる交流人口というのがありますね。その交流人口という、つまり人々が来られたり、観光であるとか、お仕事であるとか、遊びにとか、いろいろと来られると、そういう交流人口が大事です。で、静岡県には年間１億人以上の方がお越しになるんですが、それが私は今追い風が吹いていると。もちろん 3.11 以後、大変苦しいときがございましたけれども、少し落ち着いてまいりまして、そして何といっても新東名が前倒しで開通いたしまして、先ほど申しましたように、もう大変な人々がお越しになっていると。しかもそれが食材を求めに来られていると。

本県の食材の数は、３年前までは食料というとカロリーベースの自給率ということを言ったんですよ。日本は今 40％で、これを 45％、できれば 50％にしたいと。食料自給率を上げようと、その食料自給率の単位になっているのはカロリーだったわけです。だけど見てください。私はカロリー過多ですよ。大体全体にカロリー過多の人が多くて、特に東京などは食料自給率は実は１％です。たくさんの残飯として、パーティや何かで食べきれないので、それを捨てるわけですね。

その捨てたものを例えば人々が会社に出勤する前に、カラスが出勤してきまして、そしてそれをいっぱい食べて帰るので太っているわけですね。だからインドの人が見て、同じカラスなのに何で日本のカラスは太っているんだと言って、栄養過多なんですよ。

だからいかにしてカロリーを減らすかということも考えなくちゃいけないと。そのときに一番健康なのは何かというと毎日葉っぱを食べることじゃないでしょうか。やっぱり新鮮なものをバランスよくいろいろなものを食べるということですが、じゃ食材の数はと勘

定したら、実は農産物で 167 あったと、海産物入れて 219 と、どちらも日本一ですよ。

ですから日本一の食材の王国だということが、これはいいことだなと思ったら、何とＷＨＯ世界保健機構が「健康寿命」というコンセプトで、平均寿命じゃなくて、年をとっても日常生活に支障を来さない年齢、これを「健康寿命」、これをＷＨＯが出されて、それを厚生労働省が 47 都道府県で「健康寿命」を各都道府県ごとに調べたら、静岡県は女性が日本一だったんですね。男性の方は全国２位です。ちょっとお酒飲み過ぎているんですけど、ですから共に総合すると日本一だということで、そうすると週刊誌などは、なぜ静岡県は日本一なんだと。そうすると 219 品目というのは、ちゃんと『週刊ポスト』なんかに書いてあるんです。

「なぜ静岡県が日本一か」という見出しがあったので、その記事を見ると、219 品もの日本一の食材があり、お茶を日本の平均の２倍飲まれていると、静岡県民の方々が。だから健康なんだと。つまり食習慣がいいということです。それが口コミで広がって来ておられるんですよ。だから今交流人口がものすごい規模で増えております。

そして訪れてよし、かつ住んでよしにすればいいわけでしょう。つまり発言者１さんみたいになればいいわけです。訪れてよし、住んでよしと、こうなればいいわけですよね。後は産んでよし、育ててよしと、こうなればさらにいいと、こういうわけであります。

それでどういうふうな特色を出したらいいかということなんですけど、新東名を皆さん乗られましたか。そうすると浜松、昔はいわゆるＳＡ、ＰＡといっても、ちょっと休憩して、用を足したり、あるいはちょっと腹に足すものを入れて、ぱっと行くだけだったですね。

ところが今、ＳＡに行ってごらんなさいませ。静岡の西へ行くと、楽器があるので、そういう形をした建物に、例えば石松のギョウザですね、浜松ギョウザのトップクラスです。そんなのが入ったりしているわけです。要するに食材がそこにあると。森町へ来ると、今ごろですと次郎柿でしょう。ちょっと前ですと梨だとか、あるいはトウモロコシだとか、それを森町ですと、これは宿場町ですから、そういう風情の建物を作ってやっているわけです。だから単なる四角四面のものを作って、さあおいしいから食べていきなというような感じじゃないんですね。その食べる環境を作っている、おいしく食べる。そしてその周りもきれいにしている。

だからそれぞれ沼津、あるいは清水、先ほどの西と違うようにしているので、地域の特性をよく食べ歩きや、あるいはまち歩きをみんなで一緒にして、地域の特性を生かして、

そして食というのは 2,3 時間たつと必ずおなかが減るし、のども乾きますから、これなんかいい水ですよね。これ源平川の水かと思ったら柿田川の水で、何か歌が書いてあって「富士の根を幾歳潜る白雪の清き水湧く柿田川かな」と、きれいな歌が詠み人知らずで書いてあると、そうすると何かおいしく飲めるような感じがするじゃないですか。こういうちょっとした工夫をしていると、まず訪れる人が増える、出会いができる、こういうところに住んでみたいわねと思わせたら勝ちですよ。

こんなところはもう二度と来たくないというのと、こんなところに住めればいいわねというのでは、もう天地の開きがありますので、そういう形で実は地元力を上げていく、個性を磨くということが大事なんじゃないかということで、むしろ外から来られた方のほうがそういう目を持っているんじゃないかということで、やはり発言者１さんのように東京育ちの方で、たまたまお母様の御縁があってこっちに来られたということであると、こちらの魅力を知っているので、お互いにそれを語り合いましょうという、そういうやり方ができるんじゃないでしょうか。今 2,500、3,000 人が１万人になってくると、一種の三島の文化みたいになってきますね。

それから発言者２さんは、これまた名人です。いろんな賞を取られている。大体今は小松菜とおっしゃっている。畜産で有名で、農林水産大臣賞を取っているんですよ。ですから、もう農業経営士、これは要するに博士号みたいなもんです。もう農業の神様みたいな人です。ですから安全安心は当たり前、おいしくなくちゃいけない、つまり品質が大事です。それはだれが判断するか。消費者だ。だから自ら消費者の観点でする。だから学校給食から、ああいうクレマチスのプリマヴェーラですか、ああいうところにまで納められていると。どこについても一切手抜きをしないで、最高の品質、おいしいものを、安全安心を当たり前にして届けるという、これがこれからの農業をする人の鑑だというふうに思いますね。

ですからそういう農業を志す人が、私も県の中に農業高等学校があり、明日、今日かな、田方農業高等学校にも参りますけれども、磐田の方にもそういうのがありまして、そこでいわゆる普通高校に行って英国数理社ができて、何の生活体験というか手に技術を持ってないというよりも、農業とか、そういう職業にかかわる学校で勉強するということが大事で、そうしたときの先生になれる人が発言者２さんみたいな人なんですね。これを大事にしなくちゃいけないと。

それから、もう全国でやっている何とか大臣賞みたいなものは要らないと、そんなもの

大きな農業をやっている人がもらうだけだから、実際には日本の農業はそんな大規模なところでやっているんじゃないから、ふじのくにというか、あるいは静岡県の農業賞をやったらどうかと言われて、もっともでございます。やらせていただきましょう。

そういうふうにして、実は全国で一番美しい村運動というのがありまして、これは世界で一番美しい村づくりというのが日本にあるんですよ。それはもうこれだけたくさんある街の中から一つの小さな集落、そこを選ぶというのはなかなか入らないので、ふじのくに静岡県の美しく品格のある邑づくり運動も始めているんですよ。同じようにこの農業賞も、気が付かなかったので、今日提言いただきましたのでやってみたいと思います。

それからエコファーマーなんていうのは取るのが当たり前だとおっしゃる。なかなかそうは普通言わないんですが、取るのが当たり前だと。取ったらちゃんとやっているか、やっていない。だからエコファーマーの組織化をしろと言われた。「へへえっ」というわけですね。組織をどういうふうにしたらいいのかを教えていただいて、その県下のエコファーマーの方たちの組織化を図りまして、お互いの情報を交換するということを通じて、ネットワークを広げていって、それぞれの長所を学ぶというふうにしていきたいと思います。

今のエコファーマーの組織化、それから農業賞、県下の県の農業をやっている方たちを励ますというような、それからまた農業経営士の方たちになっていただくという、そういうものをもっと、普通高校も大事だけど、そうしたことの方がもっと大事だというふうに私自身は思っておりますものですから、そういう方向性をこれから来年度にかけて作り上げていきたいというふうに存じます。

＜発言者３＞

今日は私が関わっている子育ての応援についてお話しさせてください。

私も発言者１さんと同じように結婚を期に東京都の青梅市から静岡へ来ました。一番に感動したことは富士山でした。四季折々の富士山の写真を何枚も撮り、実家の方に住んでいる友達に配ったことを思い出します。そして夏の日差しは強いですが、気候が温暖で、レンゲ畑や稲の成長を間近で見られ、自然が豊かなところというのもすごく心に残ったことを覚えています。

主人の両親は近くに住んでいましたが、友達と言える知り合いがいないところで子育てを始めました。１日中息子と二人きり、１日中大人との会話がないという日々を経験しました。息子が歩けるようになったある日、公園で誰が参加しても大丈夫な子育てサークル

があるよと声をかけてもらいました。それは地区の公民館で私と同じような親子連れが集まり、体操や遊びをしていました。

息子を連れて何回か通ううちに、「一緒に公園に行こう」「今度お弁当持ってうちに遊びに来ない？」と声をかけてくれる友達ができました。孤独な子育てから子育て仲間がいる子育てに変わることができました。他愛のない話から、子どもの悩み、仕事で帰りが遅い父親のことなどのおしゃべりができ、子ども同士で遊ばせながら、自分たちも楽しく過ごすことができました。

子育てサークルで友達ができたことがうれしくて、子どもが大きくなると、今度は参加者ではなくスタッフとして関わるようになりました。この子育てサークルは平成 12 年、ちょうど 2000 年の４月からハッピーキッズという名前になりました。函南町教育委員会生涯学習課の支援団体として、函南町の中央公民館の多目的ホールを借りて活動しています。スタッフは８人、以前ハッピーキッズに参加してくださった方や、もと民生委員さん、子どもが好きだよという方、ボランティアで運営する自主グループです。

講座の材料費やお誕生日などのプレゼント代などのために１カ月 500 円の会費を集めて、長いお休みを除く毎週水曜日､年間約 40 日活動しています｡今年度４月からの登録の方は、約 110 人になりました。その中で函南町の方が 89 人、ほかに三島市、伊豆の国市、沼津市からも来てくださっています。今年度３歳になるお子さんが約 50 人、今年度２歳か１歳になるというお子さんが約 60 人、０歳から３歳の子供たちの団体です。

ハッピーキッズはお母さんが運営主体と思っています。私と同じように孤独な子育てから子育て仲間がいる子育てになってもらえたらいいなと思っています。名前はハッピーキッズですが、お母さんがハッピーになっていただけたらなと思っています。

どんなことをしているか。リズム遊びや体操や、絵本の読み聞かせ、歌を歌ったり工作をしています。最近では絵具を使って来年のカレンダーを作りました。これは大人のスタッフが作ったものなんですけれども、この 365 日の日にちというのは、大人にとってはたった１年だけれども、小さい子どもたちにとってみると、この１年でできなかったことができるようになったり、お話が上手になったり、いろいろ成長する１年なので、この１年、本当に幸せになってほしいなという思いで、毎年この時期干支のカレンダーを作っています。

この０歳から３歳の年齢のときというのは、集団生活、幼稚園や保育園に入る前の孤独な子育てになりがちなときであり、親子関係を築いてほしいときであり、24 時間一緒にい

られる限られた時間のときだと思います。親子の思い出づくりの場になれたらなと思っています。

函南には他にもおもちゃ図書館など、子育て支援の場があります。来年には図書館と支援センターができます。そのいろいろな支援の場の一つとしてハッピーキッズがあればいいなと思っています。明日も水曜日なので中央公民館で活動しています。もしお時間あったら、ぜひ見ていただけたらなと思います。

これはお願いというか、できたらいいなと思っていることなのですけれども、この場に来られない方のために、ハッピーキッズのスタッフとはまた別に、県の子育てサポーターリーダーの養成講座を終えた仲間で、地区の公民館に出向き、子育てサロンを始めました。この子育てサポーターリーダーは、西部、中部、東部の方たちが集まっていろいろな勉強をしたり、交流会をしたり、情報交換会ができた会だったので、とてもよその方のお話が聞けて刺激になったので、またこれからもこのような会が、養成講座みたいなものがあったらいいなと思います。

＜発言者４＞

皆さん、こんにちは。「三島夏まつり子供しゃぎり運営委員会」の直前会長ということで今日はお呼びいただきました。毎年８月 15、16、17 日に三島の大社の社頭で子どもたちが社頭の両脇に、今ちょっと音が出ていますが、こんな音をお聞きしていらっしゃる方が多いと思いますが、ここを運営させていただいております団体でございます。

今年で 36 回ということで、登録団体 42 団体で、お祭りに参加できたのが約 32 団体で、1,500 人の子どもたちが参加をいたしました。皆様の応援とともに約 48 万人、昨年は 50 万人出たんですが、今年は 42 万人の方がこのお祭りを見にいらっしゃったということで、年々ますます盛況になっていくことを私たちも願っております。

私たちも今年 36 年ということで、振り返りますと第１回が昭和 52 年にミカン箱とベニヤ板ということで、大社の中の舞殿で開催されたのが第１回目でございます。当時私たちは三島青年会議所というところが運動を起こしまして、三島には３つ無くなりつつあるものがあるということを唱えられました。

１つは三島にこんこんと湧き出ていた湧水が、楽寿園、そして近隣のところにだんだん出てこなくなったということをお聞きしているということを唱えたい。

そして２つ目は、三島は錦田、中郷、そして三島という村と町がくっついて昨年市政 70

周年を迎えているわけですが、だんだん一緒になるにつれて旧町名が忘れられていると。昔は大社のところも伝馬町というふうに呼ばれたそうですが、こういう昔の呼び名を決して忘れてはいけないということで、今は石塔で立っているような形になっているかと思います。

そして３つ目がこの「しゃぎり」が、当時は本当に数少ないところしか立てておりませんでした。御存じのように当番町という制度がありながら、当番の年に当番の町内が自分たちのところに「しゃぎり」がないというようなことで、他にお願いをするような時代もありました。そこで昭和 52 年、この限りない伝統芸能を継承していくことは子どもたちしかいないということを当時青年会議所の理事長が提唱されまして、この運動を展開していったということを伺っております。

私は第９回目から引き継いだわけでございますが、当時は古い方は御存じだと思いますが、三島の大社の社頭の両脇は、香具師の方がたくさんお店を展開されまして、広小路から大社まで 700 軒から 800 軒の香具師の方がいらっしゃったかと思います。三島のこちらの静岡県の県警のいろいろな御指導の中で、今は許可がないと露店は出せないという本当に規制が厳しい中で今の方々になっておりますので、今大社の社頭の両脇は、昔は全国の親分さんがいらしたというふうに耳にはしているのですが、今は１軒もございません。「子供しゃぎり」も雛壇のような階段状で、たくさんの子どもたちの顔が見られる、そういう晴れ舞台となっておりまして、ここで寒い３月時期から手をこすり、そして眠い目をこすりながら一生懸命覚えた成果を子どもたちが発表するすばらしい「しゃぎり」の発表の場となっております。

さて、この 480 年ほど前から伝わっております「しゃぎり」という伝統芸能ですが、今から 480 年前に幸若與惣太夫という方が、三島の明神の前で幸若舞を指導するために三島にいらっしゃったということで伺っておりますが、最初は「しゃぎり」ではなくてお囃子、お囃子が７曲だったそうです。里囃子・道囃子・吉野囃子・山囃子・松囃子・時雨囃子・祇園囃子と、こんな形でお囃子で鼓と三味線を交えたこういう形からスタートいたしております。

後にこの「しゃぎり」といういろいろな形で伝わりまして、この「しゃぎり」は７曲、今「神楽昇殿」という曲が先ほどかかっておりましたが、五穀豊穣を願って、近隣の村人に伝えて、このことを後世に伝えるようにというそういう文章も今でも書面が残っているそうです。そんな古い歴史のあるこの三島囃子というのを今は市の方にももちろん指定を

受けておりますが、平成３年に県の無形文化財にも指定されているという貴重な伝統芸能です。

まだまだお話はたくさんありますが、そんなさなかで今年 36 回目を迎えたわけでございますが、昨年東日本大震災という大きな災害が起きてしまい、これを振り返りますと、私ども委員会が 17 年前の１月 17 日に阪神・淡路大震災が皆さんの記憶にも残っていらっしゃるかと思いますが、その年に私たちの運営委員会はまだまだ十数年しかたっておりませんでしたが、子どもたち、そして保護者の方々と心を一つにして、僕たち私たちにできることという形で、17 年前に募金活動をした経緯があります。その年の秋に神戸のポートピアという仮設住宅へ被災地の方々をお見舞い、そして激励にもお伺いしたこともありまして、当時は日帰りで行ってきたことを覚えております。

このことを振り返りますと、昨年起こりました３月 11 日の東日本大震災で多くの方々が心を痛めて、そのことを私たち委員会の中でもお話をさせていただき、今は登録の 42 団体の方々の御理解を得て、昨年６月に食育フェアもございましたので、市政 70 周年を唱えた６月 17、18 日の日に市長様に御発声をいただきまして、今からできる限り行けるまで集めようということで、今年このお祭りが行われるまでの 400 日間、一生懸命多くの場所で神社、そしてイベント会場で子供たちが声を出して集めた 100 万円を、今年の９月 15 日に岩手県山田町の祭典、昨年は開かれなかったそうですが、この祭典にかけつけてまいりました。

子どもたち、私どもも含めて 35 名で行きましたが、行きは 14 時間、帰りは 16 時間で約 30 時間ということで日帰りはとても無理ですので車中泊で１泊、そして２泊目は現地の町で小さな小さな宿泊所があります、こちらの方で１泊をいたしまして、もう本当に往復 30 時間 1,200 キロという距離を行ってきて、現地の方々の何とか被災された震災遺児、震災孤児のためにお届けしたいという思いを伝えてまいりました。

子どもから現地の山田町の町長様の方へお渡しさせていただき、町長様から後日改めて、もうお亡くなりになっておりますが、元総理大臣の鈴木善幸さんが設立をしております鈴木善幸教育基金というところに、町長様からこちらの方にお渡しいただいたということも伺っております。こんないろんな経緯がございまして、子どもたちを預かっております私たちの団体は、今後も岩手県の山田町のお付き合いの方を細くてもいいから、今後も支援をずっと続けていきたいと考えております。

最後にちょっと時間が大分経っておりますが、要望が２つ知事の方にございまして、私

たちお祭り３日間を演奏させていただいております中、毎年本当に寿司詰めのような３日間の行事がございます。15 日は山車と「しゃぎり」の日、16 日は伝統芸能の日、17 日は踊りの日ということで、それぞれのテーマがついておりますが、午後３時から午後９時までの間の６時間の中に３日間ぎっしり行事を詰めております。

事務局の商工会議所、観光協会の方々も宿泊されて、この時間帯を組み上げていらっしゃいますが、どう考えましても車が往来する中、午後３時にぴたっととまって、それというわけにはいきません。また午後９時も終わりましたら車は通りますから、避難しろと言われても、今は 50 万人が３日間に三島の祭りをにぎやかすということは、この６時間は非常に厳しいものとなっております。でき得れば午後２時からのスタートにさせていただき、午後９時半まで皆さんの安心安全に自宅まで戻れるまでの時間のこの安心安全をぜひとも御希望申し上げます。

それからもう１つは、三島は空き店舗対策に対しまして、三島の市長も十分なサポートをいたしておりまして、三島は電柱地中化もなり、きれいな街並みができました。そして今花いっぱいの街になってきております。歩行者天国も５月と 11 月の年２回は行っておりまして、盛大に行っておりますが、このさらに空き店舗対策に力を入れていらっしゃる三島市民の方々もそれを願っております中、でき得れば年に４回の春夏秋冬にこういう歩行者天国という街を一斉に盛り上げるお祭りを開催したいと願っておりますので、やはりこちらに関しましても道路使用をしなくてはいけません。道路の許可というのはなかなか難しい問題もたくさんあろうかと思いますが、ぜひ知事の方で何かいいお知恵をお借りできましたら御指導いただきたいと思いますので、この２点につきましてどうぞよろしくお願い申し上げます。

＜発言者３、発言者４に対する知事のコメント＞

今、発言者３さんと発言者４さんの方から子育てに、あるいは子どもを元気にするための試みについて承りまして、大変考えさせられるところがありました。特に発言者３さんは東京の割と深いところですか、青梅、そこから出てこられて、あそこからだと富士山はちょっと見えないですからね。ここで富士山をご覧になって感動されたというのは、これはもう日本人の心に響く、同じ気持ちの人がいるんですね。ですからさっきの発言者１さんといい、今の発言者３さんといい、富士山を見られるところに来れてよかったですね、まずは。都会性がある、一方で緑が豊かである、こういうところですから、函南というと

ころは熱海と三島の真ん中で牛乳もおいしいし、ですから子育てにはぴったりのところだと。

ところがお一人で子育ての孤独を味わわれたというのは、恐らくほとんどのお母様方の共通する悩みじゃないかというふうに思います。それを子育てのネットワークのハッピーキッズに出会われて、そしてお友達ができて、ネットワークができて、そしてもう恐らく発言者３さんの坊ちゃまは立派に成長されたに違いないと存じますけれども、にもかかわらずその自分の悩みを持っている若いお母様がいるに違いないということで、そのハッピーキッズ、これがハッピーになればお母様がハッピーになれる。お母様がハッピーだと子どももハッピーに違いないですので、ですからそういう絆をお子様が大きくなられた後もなさっておられるということが、本当にありがたく思っています。

やはり子育て経験者の方々ほど、今子育てに真っ最中で、いろいろと悩んでいらっしゃる若いお母様方にとって頼りになる存在はないと思うんですね。通常は自分のお母さんとか、あるいは御主人のお母さんだとかがすぐそばにいらっしゃる場合には、特に自分のお母さんがいるといろいろとあれですけれども、今こういう御時勢ですので小家族で生活することが多くなっていますから、やはりその地域の一人っ子が多いこういう世相の中で、お母様経験者の方々が若いお母様方を励ますためにこういう会をつくっておられるというこれはほかのところもやっていただきたいと。

今１歳、２歳、それから３歳で 110 名ですか、沼津や三島からもお越しになっていらっしゃるということなので、こういう運動といいますか、こういうネットワークが静岡県下で広がりますと、１人目のお子さん、２人目のお子さん、あるいは３人目のお子さん、それぞれ違うと存じますので、そうしたことを通して子育てをしやすい環境づくりに、ぜひリーダーシップを一層発揮していただきたいというふうに思いましたね。

いずれにしましても、県では今相当本腰を入れてやっておりまして、我々の方としましても県下全体で地域の子どもは地域で育てられるような環境をということで取り組んでおりますが、まだきっちりと現場に生かす形になってないかもしれませんので、これを皆様方のようなそういう草の根、それから我々のような全体のいろいろな情報について御提供申し上げたり、ネットワークをつくれるような、そういうお手伝いをさせていただきたいというふうに思った次第でございます。

それから発言者４さんは大変興味深いお話をしてくださいまして、480 年前ということだと、1500 何年ということですよね。だから室町時代ですね。（「1532 年」）ですから応仁の

乱が終わった直後ぐらい、もうちょっと後か。ともかくそのころから続いているということで、お囃子が「しゃぎり」ですね、あって、これを昭和52年からきちっと復活させられて、だんだん三島も本当に源平川はきれいになるし、「しゃぎり」は復活するし、市長のもとでお花のまちになってくるし、全体がガーデンシティで、このお花も余りにきれいなので、見とれてしまいますよね。非常に美しいお花を美しくこういうふうに飾ってくださるというそのハートが伝わってきますね。そういうことで今三島は注目されているというふうに存じます。

そうした中で、このことが縁になって絆があって、山田町の２年ぶりの山田祭りを励ますために、何と100万円もの大金を30時間をかけて往復子どもたちも一緒になって行かれたというのは、頭が下がる思いでございます。山田町はほとんど流されたところです。我々は遠野というところに拠点を置きまして、遠野の東側に釜石があります。そこから20キロ上がったところに大槌町というのがありまして、これは町長さんも流されて行方不明になり、その後火災が起こって、水攻め、火攻めに遭ったところですね。そのさらに北に山田町があります。

町長さん、今は佐藤さんですか、前は沼崎さんとおっしゃって、沼崎さんは自分が町長になるには、子どものときに昭和の津波で自分の家が流されたと。それを何とか防ぐためにということで堤防をつくられて、その堤防が全部やられてしまったんですよ。そして彼の家も流されたんです。ただ、御本人は幸いにも御家族も含めて生き延びたと。

そして今若い佐藤町長さんが復興に力を尽くされているんですけれども、やっぱり見たらすぐわかりますけれども、とてもじゃないけれども山田町、あるいは大槌町だけで復興できるようなそういう簡単なものではなくて、いろいろな支援をしなくちゃいけないと。東日本というのはすごく広いですから、岩手県だけでも四国の大きさがあるんですから、うちの県よりももっと大きいんですよ、岩手県だけで。

ですから支援が集中的にきっちり効果があるようにということで山田町と大槌町、これは福島原発から210キロ、240キロ離れていますから、東京とか横浜ぐらい離れているんです、福島県から。ですから東京や山梨で普通に生活されているように、山田町、大槌町の方も放射能の心配はないわけですね。そこはもうがれきもすさまじいです。

そうした中で、お祭りというのは絆を取り戻すときの一番のベースになっているものでありまして、そのお祭りが復活したと。そしてこちらの絆を強めるために、こういう８月15日から17日まで「しゃぎり」のお祭りをされていられるということで、ちょうどお盆の

ときでございます。今 50 万人の人が来られていると。３時から９時が２時半から９時半にしろということですが、私がはい、わかりましたと言えればいいんですけれども、まずこれ要望してください。そこに署長さんがいらっしゃる。それから、これは私の方も警察の方に届けなくちゃなりませんで、届けるといいますか要望しなくちゃいけないので。実際にやっている方たちの要望がきちっと出ていなければ具合が悪いので、その数字を上げられて、今おっしゃったようなことをまとめられて警察本部長に言います。きっちり言いますから、そうしましょう。

歩行者天国ですが、歩行者天国も同じですね。今あそこの電柱が埋設されたというのは本当にもうクリーンヒットですよ。これでお花が飾られているというのですから、もう電柱のかわりにお花というのはすばらしいですね。クモの巣ですから、写真撮るにも。三島市長さんは気が付く方で、なった途端に、電柱を埋設された。こういうことは幾らやってもらってもいい。

それから北側は東レも有刺鉄線外したでしょう。あれ長泉ですけれども、あれは三島にならったんじゃないですか、きれいにするというので。壁もやりかえているでしょう。ようやくきれいなふうになってきたというふうに思っておりまして、だんだん、だんだん三島も山側も、それから伊豆側も全体が玄関らしくなった。何といったって東海道五十三次、静岡県の最初は三島ですから、大社がある、源平川がある、ウナギがある、今はコロッケもある。コロッケをばかにしちゃいけませんよ。

もちろんだれもばかにされてないと思いますけれども、さっき昼食時間にその話になりまして、この間皇太子殿下が育樹祭で来られましたね。天城の森でお手植えをなさいまして、きれいに晴れ上がったんですよ。そしてその翌日エコパで式典がございまして、帰り新幹線で、行きは新東名を通っていただきました。交通史の御専門でいらっしゃいますから、大変喜ばれて、しかも天城の森から降りてくると達磨山があって、そこから富士山の頂上にだけ雲がかかっていたんですよ。

10 分間だけ御休憩あそばされて、展望台があるので、そこに行って見たいとおっしゃった。子どものときに下で泳いだことがあると、沼津の学習院のときに。もちろん御用邸も９歳のときまでおありになったので、その思い出があって達磨山も下から見ていたけれども、登ったことがなかったので、ぜひそこから下を見てみたいとおっしゃって、そして殿下が立たれていくうちに、下は波がないんですよ、べたなぎで全然風がない。

ところが不思議なことに富士山の頂上にかかっている雲が動き始めたんですよ。それで

あと５分、４分、３分と、だんだん、だんだんとすうっと雲が切れて流れて頂上が見えたんですね。もうみんな感動しました。それはもちろん富士山の日にお生まれているでしょう、２月 23 日お生まれですから。殿下が最も喜ばれて、ポケットから出されたものが何かと思ったら写真機だったんです、撮っておられた。富士山の写真を撮るのが大好きでいらっしゃいます。

ちょっと話が、それで翌日の式典のときに侍従から「三島コロッケを 10 欲しい」と、はっというようなものですよね。三島コロッケ 10 ですか、何で 10 なんだろうと思って、それで 20 個準備しようと思ったんです。三島コロッケをどう準備するか、日曜日ですよ。三島駅では数分しか止まらないでしょう。そうするとうちが届けるということですよね。そのときに三島コロッケの味を知っている人がいないといけないでしょう。それでもう止まっているときに、号車はわかっていますから、そこのところで侍従にぱっと渡した。三島コロッケが宮中にもその名が知られているというと、こういうわけなんですよ。

そういうわけで、ここはそういうふうに食の都、花の都、そして東海道、箱根を越えて最初に三島の宿に入って、沼津から吉原からずっと浜松、新居、白須賀まで二十二次、抜けていくわけですが、最初のふじのくにへの玄関口ですから、そこはきれいなところでおいしいものがあった方がいい。水もきれい、富士山もきれい、人の心もきれい、そして街もきれいだ、そしておいしい、こういう地域に育っていきつつある。

函南と一緒で、ちょうど先ほど彼が言ったように二つの中の一つと、こういうわけでございますが、そういうことで歩行者天国もぜひそういうできたところから、一気に長くというわけにいかないでしょうから、交通の不便を来さないように少しずつ広げていくというようなことを通してできるんじゃないかと。これはやっぱり市民運動が基礎ですね。そしてそれを警察に言っていくと。一応お伝えするということしか約束できないのは申し訳ないですけれども、よろしくお願いいたします。

＜発言者５＞

水もきれい、富士山もきれい、花もきれい、食もおいしい、その中にぜひ音楽を入れてください。私は音楽でしか何かができない人間なので、皆さんのように力はありません。大きな企業でもありません。本当に一市民です。三島生まれ、三島育ち、生粋の三島っ子です。いろいろなところから皆さん来られて、三島のよさをお話ししてくれているのですが、それが普通で当たり前の三島っ子です。

今流れているのは、今年５月にできました市民が市民で作る三島の歌。農兵節、しゃぎり、すてきな伝統芸が三島には残っていますが、市民が作った三島の歌があったっていいじゃないの。私の活動は普通の市民の活動です。もちろんお金もありません。ほとんどボランティアです。でも心はいっぱい動いていて、大好きなこと、思い切り 100％力を出すことで、それに賛同して集まってくださってくる方たちと元気に今活動を続けています。

中心市街地でずっと暮らしていたのですが、大きなお店がどんどんいなくなり、だんだん寂しくなってきました。街のなかにいてシャッターがみんな閉まってしまって、でも何もできませんでした。私は今何ができるだろうと思ったときに、私ができるのは音楽しかありませんでした。音楽で何かできないだろうか。

そこで音楽を仕事としている私は、空きスペースを使って音楽をやろう。そこに素敵な空間を作ってやろうではないか。みんなが通ったら、何か元気になるのではないだろうか。何もできなくてもいいや、やってみよう、そんなところから本当に始めていきました。

音楽は私に元気と生きがい、いつも与えてくれます。お腹はいっぱいにならないのですけど、でも心がいっぱい動きます。どんなときでも私に元気をくれました。今この音楽、これだけで私に元気をくれます。すごくどきどきしていたのですけど、何かみんなが一緒にいてくれるような気がして、とっても温かい気分になります。

何でしょう、歌の力には本当にうんと小さなものかもしれませんけれども、心がうんと温かくなる、優しくなれる、心にしみる、何より元気、これをもらえると思います。みんなの笑顔が見たい、音楽で街を元気にしよう。今思って元気にできることはそれしかないような気が私はしています。

何かを動かす力は伝える方の心意気だと思っています。何事も 100％全力、私のこの音楽好きが皆さんに伝染していったんでしょうか。70 代、80 代、もう 90 近い年配の方たちが野外ステージでライブを行います。熱唱します。のど自慢にも出てしまいます。そしてふれあい賞、すこやか賞などという賞を取ってしまいます。人生最高の日、体で思い切り喜びを表してくれて、笑顔がいっぱい私の周りには見えています。

三島の市民は元気です。特に女性は元気です。今市長、前で聞いていてくださっていますが、とてもフレンドリーな方で、私なんかの本当の市民のところにもすっと近寄ってきてくれて、小さな小さな会合にも顔を出してくださいます。女性特有のいろんな思いに耳を傾けてくれて政策に生かしてくださる、そういう三島の温かい空気を今とても感じています。

今の自分より少し前へ、それだけで元気が出るのではないでしょうか。何かできることないかな、今「三島、三島、三島、私のこのまち」、聞こえますでしょうか。何かそれだけで泣けてきます。それだけで元気が出てきます。ぜひこの三島をもっともっと元気に、私はこれから身近なところで、近いところで地域の情報を皆さんにお伝えしたり、コミュニケーションづくり、私の使えるところ、私のできることは思い切り出して、皆さんと一緒に前に進んでいきたいと思います。

「三島、三島、三島、私のこのまち」、三島が大好きです。最後はこの音楽聞いてください。らららららで終わっております。

＜発言者６＞

私 2010 年４月から指定管理者として函南町の湯～トピアかんなみの運営管理に当たっております。ちょうど今３年目に当たっているところでございます。

当初施設利用のお客様というのは減少傾向にありました。私どもも可能な限り努力したつもりでおりますけれども、何とか減少傾向にちょっと歯止めがかかりまして、１年目、２年目、若干ずつではありますけれども、お客様がより多く来ていただけるようになってまいりました。これも本当に函南町の皆様、また非常に多く来ていただいているのですけれども三島の皆様、本当に近隣のそういう皆様に改めて感謝をしないといけないなと常に思っております。

私どもお客様を見てまして感じますのは、本当にお越しになるお客様はすばらしいお客様だなと思っています。実は私埼玉県の方で以前特別な施設の運営管理に当たっていたのですけれども、そこと比較しても湯～トピアの方に来られるお客様というのは本当にすばらしいお客様が多いんだなと、常々そう思っておりまして、本当にそんなお客様に支えられての運営管理ということで当たっております。

私どもの運営管理におきます基本的なところといいますか、それは２つあるのですけれども、１つはやはり地域に溶け込むということを中心に考えております。地元の地域に根差した、そういう運営をしていかないといけないな。地元及び近隣の皆様から本当に信頼される運営という部分を心掛けて、常に当たっているつもりです。

それからもう１点は、施設運営の中で官民のパートナーシップといいますか、行政の方と、それから我々民間としての施設運営ということが、やはりパートナーシップを持って突き進めば、その地域の活性化に何とか貢献をしていきたい、そんな思いの中で、この２

つですね、これを中心にしながら施設運営をしてきたというのが、この２年間くらいの期間でございます。

今実はちょっと取り組んでいることが１つございます。それは今朝ほども私そば刈りをちょっとやってきたところですけれども、私どもの方の施設で、やはり地場産品を使用した料理のメニューといいますか、そういったものを何とか、小さいですけれども取り組んでいきたいというふうに考えておりまして、函南町の方でも耕作放棄地の活用ということで、そばの栽培を推進されております。私どもそのそばを何とか活用して、そういう新たなメニューというものができないものかということで、今第一歩を踏み出しているところということでございます。

実は函南産のそば粉を使いましたそば粉のクレープといいますか、ガレットですね、これを１つ、それからもう１つはおいしい何とかおそば、生そばを皆さんに提供していけるようにしていきたい。そんな思いで何とかこの 12 月中には本当に展開ができるように、今地元のそれぞれそばの会の方とか、諸先輩の方々にいろいろな形で御指導をいただいて、何とか形に持っていきたいということで今進めているところでございます。

そういうことも含めまして、私ども施設運営においては本当にまだまだ目標に対しては道半ばというところでございますけれども、何とか施設に来たお客様に満足していただく、笑顔で帰っていただく、施設に来た人を豊かにする、そんなビジョンを持って運営に当たっておるところでございます。

ところで、今ちょっと別な話になりますけれども、感じていることがございます。１つは気候変動、そういったものによる自然災害、地震もありましたし台風、豪雨、そういったものが非常に多くなってきています。それから高齢化の社会、もちろんございます。それから地域経済の活性化、それから自然や歴史、文化や教育、いろんな課題というのがあると思います。これは行政における課題でもあると同時に、小さいのですけれども、我々の１つの施設の課題でもあるんじゃないかなというふうに考えておりまして、私ども本当にどういった形でできるか今考えている最中ですけれども、やはり一施設としても地域のコミュニティの場といいますか、そういった役割もやはり求められるように、どんどん、どんどんなってきているのではないかなと思っております。そういう方面も含めて今後取り組んでいきたいというふうに考えております。

今日せっかくの機会ですけれども、知事の方にちょっとお伺いしたいことがございまして、１つは先ほど言いましたけれども官民のパートナーシップ、それから公共施設、今後

の公共施設のあり方といいますか、そういうものについて知事の方からお話、御意見がいただけるとありがたいな、そんなふうに思っております。

＜発言者５、発言者６に対する知事のコメント＞

なるほど、おいしいものをいただいて、きれいなお花がある、何か欠けているものが、ないと思っていたのですけれども、音楽ですか、なるほど。そしてＢＧＭ、三島の歌が流れまして、すばらしいメロディーで、歌詞はよく聞こえなかったのですけれども、しかしちゃんと発言者５さんがその歌詞の中身をおっしゃっていただいて、メロディーと歌詞と思いが１つになっているということで、いい音楽だということで、私の方もほのぼのとした次第でございます。

そして三島の音楽はそういう空きスペースでなさっておられるということですが、ちゃんとした方がいいですね。

しかしそれはどういうふうに活用するかと。そのうちの１つのヒントが音楽の館みたいなものが、日常空きスペースとしてそこに何か音楽を奏でようという、そういう底力があるところが、一方であるときにそこで自分たちの練習の成果を発揮するという、あるいは最高のいろいろな音楽をする方、ミュージシャンがやってきて演奏するとか、これはもちろん三島の人や函南の人、さらに長泉はいうまでもありませんけれども、東京の人が来られてもすぐ帰れるということですから。

何とかここはそういう芸術の香りのするようなものができないかと。文化会館はちょっと古いと、駐車場もないというふうに思っていまして、そんなことを夢想しながらやっているのですけれども、果たして市長はどう考えていらっしゃるんでしょうね。大変関心のあるところで、ですからそういうことについては食とお花と音楽というのは三拍子そろわないといけないと、こういうことですからね、そのとおりだと思いました。

そして特に発言者５さんのお話で感動しましたのは、お年寄りになっていくと、あるいは体が弱っていくと、だれでもそういうふうになっていきますから、しかし身体は弱っても音楽で励まされるということですね。これでバランスがとれる。いや、体が丈夫でも気の小さい人はいます。そうしたときに音楽で励まされるということは確かにあると思います。そうですね、どこか林なんか歩いていて、小鳥のさえずりが聞こえる、いわば歌ですよね。きれいなさえずりが聞こえてくると、本当に心が弾みます。

同じように、人が心の弾んだ気持ちをそのまま音楽に乗せて、そうした音楽があふれる

街に三島がなるのは本当にすばらしいと思うし、その弱っている人、困っている人のハートに届くような、そういう三島は三ですからね、音楽とお花と食、これで三拍子そろうんじゃないかと思うのですが、そういうことでございます。

発言者６さん、湯～トピア、埼玉県、海のないところですから、ここに来られて湯というのはお湯の湯なんですね。それとユートピア、理想郷といいますか、これとをかけていらっしゃるということで、町長さんと一体になってなさっておられる。これ何か成功しているようで何よりのことです。こういう中でコミュニティをつくり上げていきたい。

函南は最近、仏の里美術館ですか、あれがすばらしいですね。恐らくその昔はかなり古いお寺にそのまま安置されていたのだと存じますけれども、ああいうきれいなデザインのところで仏様をその価値にふさわしい形で展示されると、もう何といいますか、輝きが違ってくると。あれほど美しい、またしかも平安末期から鎌倉初期ということで、800 年近く前のものが、そこにああいう形で大事にされていたと。いや、京都や奈良だけじゃなくて、ここにそういうものが残っていたということで、私はあちこちで宣伝しまくっているのですが、いや、というよりも自然に出てくるわけです。函南といえば、今まで丹那牛乳が有名ですが、それが今はあそこに来光川とかというね、名前もそういう感じじゃありませんか。ですからあの美術館はすばらしい。

ですから今度また塚本から塚原まで、平成 25 年には東駿河湾環状道路もできますし、それから町長さん、道の駅というんでしたっけ、あれ、今造られていますね、いいところに造られていますね。川の駅、道の駅でしたっけ。

＜函南町長＞

道の駅、併設です。

＜知事＞

併設ということで、道と川が併設して、きれいな水のほとりに憩いの空間をつくろうということで、両方が、三島と函南が一体的に相乗効果で魅力を発信されていくという時代が来つつあるというふうに思います。

この公共の施設をどう使うかということですけれども、大体我らがやってもだめなんですよ。大体失業しないでしょう。ですから余り力が入らないです。だから役人というのは、業績が悪くなって会社が潰れたというようなことがないじゃないですか。だから役人だけでやっていたらだめですね。民間の知恵でやらなくちゃいけないということで、官民のパートナーシップというのは、公共の施設ですからだれもが使えるようにしなくちゃいけな

いと、なるべく安い料金で、しかし民のいろいろなアイデアを入れないといけないということで、こういう発言者６さんのような方の力が必要なんですね。

このパートナーシップをやるときに、人をどういう人にお願いするかということで、こういう人にお願いすればいいということなんです。パートナーシップが大事だということに尽きるわけでございますが、民が建てると民のいわば利益中心になりかねません。しかし同時に利益が上がるようにありとあらゆる工夫をされるというそこが大事で、その創意工夫をする民間の活力と、そして公共の施設だということで、税金をいただいて、そしておつくりしたものを活用していただくというための入れ物はやはりそれなりに造ると。そこを民間の力で皆さんがハッピーになるような、幸福になるようなものにするためにはパートナーシップが不可欠だというふうに存じます。

最初に、発言者６さんが地域に溶け込むというふうに言っていただいたのがありがたいですね。やはり地域の心を心としてお客様、来ていただく方が本当にいい人だと言ってもらっているのは大変ありがたいことですというふうに思いますし、ある意味で当然のことを言っていただいたのかなとも思いますけれども、三島の人は本当にいい人だというふうに言われているので、大いに利用していただいて、お客様の見本みたいなものを見せていただいて、そして大いにいろいろと注文されるといいと思いますね。

お客様が注文するというのが、その公共施設の質が上がっていくすべてです。使っている人の声を聞くというその姿勢がないと決してよくなりません。使っている人が勇気を持って言うことも大事です。ただ声援になってはいけないので、町長さんに言ってもらうとかいろいろ工夫をしなくちゃいけないと思いますけれども、使用する方たちの声が届かない限りは、なかなかうまくいかない面があるのではないかというふうに思いました。

＜発言者１＞

先ほどちょっとお話の中で、交流人口が人口増につながるように私も頑張ってやっておりますが、逆にこれ以外に交流人口を増やすという意味で仕事の面で、私みたいにこの場所で仕事をしたいとか、そういう人を呼び込んだりとか、そういうのは知事は大切だと思われているようですし、これから静岡県として重視したいことがあれば教えていただきたいと思います。

＜発言者１に対する知事のコメント＞

若い人に仕事がないというのは非常に辛いことです。仮に年いっても、定年退職を迎えても皆元気ですから、健康寿命が何しろ日本一ですから、定年が 60 あるいは 65 になっても、70 代まで健康寿命が日本一だと言われているのですから、たとえ毎日ではなくても週に数回でも何か仕事があるということは、とても生きがいになるというふうに存じます。ましてや若い人においてはということでございまして、それでどういう仕事がいいかというのはなかなか難しい。

一人一人好みがありますが、ただ福祉を必要としている方がたくさんいらっしゃいますので、そういう優しい気持ちを持っている方がきっちりと、きつい仕事の場合もありますので、ちゃんと報われるようにしなくちゃいけないということで、少し給金が低いということがございます。何とかこれを変えたいというふうに今思っております。

それからもう１つは、いろんな仕事がありますけれども、大地に近い仕事がいいなという気がします。今失業したと、ローンがまだあると、最初の方はしばらくは失業保険で済んだと。しかしついに仕事が見つからない。そうするとマンションは管理費も払わなくちゃいけない、借金も返さなくちゃいけない。そして箱の中ですから、生きていく場がないですね。しかしもしその周りに土があれば、ジャガイモ一つ植えておけば生えていきますよね。ですから農といいますか、農業といわなくても農という土に親しむということがとても大事じゃないかと。

先ほど発言者６さんの方から耕作放棄地を使っておそばをつくられていると。耕作放棄地も長く放っておくともう使い物になりません。今は本県だけでも 17％ぐらい、耕作地の 17％ぐらいが耕作放棄地で日本の平均の２倍以上です、日本は 7～8％ですから。そのうちしかし半分ぐらいはもう使い物にならないぐらい荒れています。

ですから私は使い物にならないくらい荒れているところを農地として持っている方は、これはちょっと具合が悪いんじゃないかと。10 年間何もしない人を何らかの規則を設けて官の方に譲っていただくか、自由にさせていただくかなりして、農地を農地へ戻すということが必要なわけです。それがある限りにおいて飢えることがないと。少なくともしばらくは食べていけるということがあるのではないか。そして場合によってはそれを職業にするというそういう発言者２さんのような名人になるというのはなかなか大変ですけれども、育て方を教わっていきながら、少しずつ使える土地を増やしていくというふうなことがこれから大事になっていく。

本県の場合には、特にこういう恵まれた自然環境のところは、食文化というものがこれ

からは芸術性を持ってきましたよね。文化性、食育というようなことを通して、こちらでこの間国民の食にかかわるお祭りが昨年の６月、食の文化祭、あれ過去何回か開かれて今までで最高の人が、天気が悪いにもかかわらずお越しになられたわけです。いかに関心が高いかということです。

そして食というのは安ければいいというものでは、もちろんお金を払わなくちゃいけないから。一方で安全なもの、安心なものを家族に食べさせたいというのがございますから、ですからそういう意味では価格と品質というのがありまして、そういう品質でここは勝負できるところですね。付加価値が高く付けられるところでございます。そうしたことに従事している限りにおいては、少なくとも自分の食べるものについては心配ないじゃないかということで、耕作放棄地を一番早く減らす市町がどこになるかという競争もしてほしいぐらいに思っております。

そこが実は後継者がいない、林業もそうです、漁業もそうです。第一次産業は実は後継者がいない。つまり仕事がここにあるにもかかわらず、人がいない。一方で失業者の方がいらっしゃる。失業者は５万 5000 人だったんです、４年前は。しかし今は 8 万 2000 人に増えました。これ３万人近く増えたので、３万人失業者を無くそうということで、「３万人雇用創造アクションプラン」というのを今立てて、一番直近の失業者の数が７万 2000 人です。８万 2000 人から７万 2000 人に減りました。これを何とか５万 5000 人に。５万人ぐらいはいるんです。うちは 370 万いらっしゃるでしょう。労働人口というのは 300 万近くある。仕事を替えるとか、何らかの形で失業をする人は必ずいます。その健全な失業者数というのが大体５万人強ぐらいです。そこまで持っていきたいということで必死なわけです。

ですから仕事を創るのに、従来のような大企業だとか、あるいは都会における企業だとかということでなくて、本県に 20 万の事業所がございます。99％中小です。先ほど発言者２さんがおっしゃったように中小の農業と同じで、そこのところが支えているんですね。ですから職業に貴賤はありませんし、大であれ小であれ、大きなところに行くと歯車の一つになっちゃうし、小のところだと自分の実力が発揮しやすいし、ですからそういういろんな職業に就くことができる、それが当たり前だという文化を創り上げていかないと、東京的な何か大企業が一番いい、ハイカラだというふうなそういう文化から自立して、この地域に根差して、地域の人の消費によって支えられるという地産地消で確実に支えられるということができるそういう文化をつくれるような第一次産業というものが大事だと。

食とかこういうお花ですね、こうしたもの、これは確実に未来がある。だって東京は土

がないじゃないですか、ビルディングですよ、コンクリートですよ。だから彼らは必ず買わなくちゃいけない、彼らは必ずお花を買わなくちゃいけない。こちらは花道路でちょっと持っていけるようなところがそこら辺にあるということで、ですから土があるということは実は健全なことです。それはもう生命の主体ですから、新しい生命を育むのが土です。きれいな水にする、水を浄化するのも土ですね。

ですから、そうしたものと身近にいるということは健全であるというふうに存じますから、そういう意味で食についても、いわばフロンティアだと。新しい仕事のフロンティアが食にかかわる文化のところにあるというのが三島や函南だと、大きな声を出して言えるんじゃないかと。なるべく多くの人が来て買ってもらえるようにして、店が大きくなるように、またたくさん高い農産品を作れるようにしたいということで仕事を創っていきたいというふうに思っております。

＜傍聴者１＞

今日はいろんな御意見がありまして、なるほどだなというふうに思ったのですけれども、最後に知事自身が公共施設のことについてお話をなされました。この健康センターは公共施設であるわけでありますけれども、ここの活用が若干足りないんじゃないかというふうに私思うわけでありますけれども、背後に箱根山を控えておりますね。この箱根山とこの健康センターをうまくドッキングできないかなというふうに思うわけであります。

以前に山形県の上山という町にお伺いしたときに、あそこには高地トレーニング場というのがあるんですね。確かに考えてみましたら、あそこは 2,000 メートルぐらいの山があるものですから高地トレーニングもできるかなと。箱根の山はちょっとそれは難しいなと、峠でも 850 メートルぐらいの高さですので。そうしましたら低地でもできる、箱根山の起伏を利用したトレーニングの場所ですね、こういうものをこの健康センターを中心にして整備したらどうかなと、こういうふうに思ったわけであります。

ここにはいろんな器具を使ってトレーニングする場所もございますけれども、それはそれとしても、やはり自然の起伏を利用した中で、例えばここの坂をどれくらいのスピードで行ったらば大腰筋が鍛えられるとか、ここを行ってはどうかというようなことが、幾つかのコースができるんじゃないかなと、こんなふうに思っているわけであります。

三島には箱根の里というキャンプ場もございますので、そういうところをよそから来た人たちに活かせるように使ってもらうのもいいのかなと思いますし、このちょっと下には

温泉もございますので、そういうものも活用していただくことによって、静岡県下のアスリート、あるいは全国のアスリートも、交通が大変便利なこの健康センターを中心とした、箱根山を活用したものができたらいいなと。もちろんこれは三島にございますので、三島、函南の首長さんの中でタイアップして、この施設を中心とした新しい健康ゾーンができたらどうかなと、そんなふうに思うわけでありますけれども、いかがお考えでしょうか。

＜傍聴者２＞

富士山文化遺産のことについてちょっとお聞きいたします。世界文化遺産への知事の意気込みというんですか、考え方を聞きたいんですけれども、富士の方で富士山のシンポジウムに先日参加したんですけれども、そのとき副知事も見えていまして、いろいろな話を聞いたんですけれども、来年６月に文化遺産、プノンペンで行われる世界遺産の会議で、もしうまくいったら登録されるんじゃないかという話を聞いたんですけれども、そのときに副知事も、富士山でいえば 7 合目か８合目ですと言われていましたけれども、９合目は胸突き八丁で非常に厳しいところですよとおっしゃっていましたけれども、その辺のところで、そのときに副知事もネットワークをつくりたいと。

山梨とそれから静岡県ですね、ネットワークをつくりたいという話をされていましたけれども、実は私も山梨県の方のＮＧＯ団体で、観光関係ですけれども登録しまして、非常に富士山の文化遺産に関心があるんですけれども、ちょっとまだ 100％とは言えませんけれども、限りなくと思いますけれども、登録された場合、知事はどういうふうに観光資源としてこれからそれを活かしてやろうとされているのか。簡単で結構ですけれども、お聞きしたいと思います。

＜傍聴者３＞

ちょっと今日の本題とはずれる問題かもしれませんけれども、会場の皆さんも多分大きな関心を持っていらっしゃる例の浜岡原発の再稼働の是非についての県民投票に関連をして、知事のお話を伺いたいと思うのですけれども、この条例案ですね、議会でもって否決されたんですが、この否決に至るまでの成り行きといいますか、経緯というのは、マスコミの報道を見ている一般の人々から見ますと、非常にわかりにくいものであったというふうに思うんですね。

どうしてこういう結果になったんだろうというところはあるんですけれども、その１点

は、ちょっと知事には少しぶしつけなところがあるかもしれませんけれども、マスコミの報道等によると、知事は最初はこの県民投票の実施に関しては否定的である、あるいは消極的であると。それが本請求を受ける直前になって賛成を表明されたわけでありますけれども、しかし私自身は、知事は終始、別に反対でも何でもなくて、よくお考えになったと思うんです。

実際知事は支持を表明され、とにかく県議会に対してもぜひ県民投票実現に向けて条例の制定に急いでほしいというメッセージを送られました。大変私はうれしく思ったんですけれども、ただ知事がそれほど強くメッセージを送られたにもかかわらず否決された。それも知事与党を標榜している民主党ふじのくに県議団ですか、20 人のうちの 13 人が反対をした。また自民党は自由投票といいますか、党議拘束をかけなかったにもかかわらず、全員が反対をしたと、こういったことがあるんですけれども、なぜそうなったのか。

この議員さんたち、特に自民党県議団改革会議ですか、の皆さんの反対した理由を見ておりますと、１つは条例の原案に非常に疑義がある、問題があって、そのままでは仮に条例として制定されても県民投票が実施できない。それから今度は修正案ですね、超党派の議員が出した修正案に関しては、これは原案と余りにも違い過ぎて、その原案を提出した人々の意に反するんだ、だから反対だ。それも本来であれば、これは議員さんたちが、要するにこの県民住民の代表として、もし住民が出したものが不十分なものであるとすれば、自分たちがそれを修正をして通そうというふうにすべきである、それが議員の務めだと思いますけれども、それを全然しなかったと。

しかし何よりも本質的な反対理由は、要するに原発のような問題は国が決めることであって、地方の住民が住民投票によって決めるようなものではない。原発は住民投票にはふさわしくない。それが本質的な理由だと思うんですが、しかし知事は一貫をして、その否決された後も、自分は原発の住民投票が実現することを望んでいらっしゃるような発言をされております。そしてまた見直してきたら、場合によっては直接請求をもう 1 回やりますからといったようなことをおっしゃっていたんですが、一方でこの否決の後に、この原発県民投票静岡の団体の役員の人たちが知事に対して、この 12 月議会に知事の提出議案として県民条例案を出してほしいと要望しておりますけれども、新聞の報道によりますと、それに関して知事は余り前向きではないという発言をされております。

その辺もちょっと飲み込みが難しいと。それほど賛成されているのであれば、今や道としては知事が提出してくださることが唯一の道であると、皆さんは知事に希望を託してお

りますけれども、それに関して知事が余り前向きでないというふうなことがまたわからない。そして 11 月 12 日に定例記者会見がありましたけれども、知事はそこで今の現行の法制度のもとでは、県民投票は実施できないというふうにおっしゃっております。

それに関して私はちょっと疑問がございまして、地方自治法に「地方公共団体相互間の協力」というのがございまして、そこには協議会の設立だとか、事務の委託だとか、あるいは職員の派遣だとか、そういったことがいろいろ書かれておりますけれども、その中でこれは 252 条の 17 の 2 というところで、「条例による事務処理の特例」という見出しの条文がございます。そこに書いてあることは「都道府県は都道府県知事の権限に属する事務の一部を」、(「質問を」) これから質問する。こういう前提が必要ですから。事務の一部を条例によって市町村の処理にすることができるといったようなことが書かれております。

ですからこういった条例を見ますと、県と市の間で話し合って県民投票を実行することも不可能ではないと思いますけれども、そういった可能性も含めて、知事の県民投票に対するこれからの知事の考え方といいますか、それについてお伺いいたしたいと思います。

＜傍聴者１、傍聴者２、傍聴者３に対する知事のコメント＞

ここを平成８年に発足して、やや閑古鳥が鳴いているような、しかしこれ非常にすばらしい施設ですね。３年前からこちらは責任者が代わって、少し上向いてきたということですが、これを企画して、今おっしゃったような箱根山とタイアップして何かしなくちゃいかんと。実は恥ずかしながら、今日ここに来たのは初めてなんですよ。真新しくて、数年前にできたのかと思ったら、もう相当時間が経っているということなので、ちょっともったいないなというふうには思っております。ですから今日ここに来たのをきっかけに、今御提言いただいたようなことを踏まえまして、この地域の資源を利用しながら、この健康センターを活用する方法を考えます。またお知恵をくださいませ。

それから健康ゾーンといえば東部と伊豆半島全体、こういうふうになっております。製薬、それから医療機械、２年前に 8,300 億円、全国一です。それから昨年は 9,300 億円、全国一です。ですから富士山の麓でおいしい食材だけでなくて、病気になった人が健康になるための薬だとか製薬機械、医療機械というのは日本一ですからね。来年は恐らく発表されると１兆円超すと思います。ですからここは本当に健康というそういうイメージが形にできるところだというふうに思っておりますので、健康ゾーンという言葉を使われましたけれども、元気になるようなそういう拠点にここを使うというふうに考えてまいりたい

というふうに思いました。

それから富士山、もう７合目と言ったみたいですが、違いますよ、９合目ですよ。私はもう来年プノンペンで６月 17 日から 10 日間かけてカンボジアで世界遺産を決める、年に１回しかないですけれども、これを決めていただくはずだと確信しています。そしてやることは全部やりました。

そしてあとはもう向こうの方々も、８月末から９月初めにかけてイコモスというのですけれども、山梨県側から入られて静岡県側、全部で 25 構成資産があるのですけれども、実は頂上も入っているんですよ。見に来られた人は 72 歳の御婦人だったんです。登るとおっしゃる。山梨県知事は登るなと言う。あなたにもしものことがあったらということでヘリコプターまで準備された。その方はアルプスでトレッキングをされている方なんです。それがわかっていましたので、たまたま天気に恵まれ、御来光も御覧になった。だからものすごくいい印象を持って帰られた。これで落としたらイコモスというか、ユネスコの方が試される。もう確実に通ります。

ただし、山梨県と何か静岡県で一緒にやっていないがごとく、一緒にやっているのです。ずっと一緒にやっている。山梨県知事とはツーカーの関係、もう合併しようと言っているぐらいですから。富士山州とかね。それくらい二人三脚でやっています。さらに静岡高校、昔の静岡一中ですが、そこを中曽根元総理が群馬県の御出身ですけれども、そこを卒業されましたので、富士山を世界遺産にする国民運動の今は旗振り役の一人です。これを国民運動にしていくというそういう段階ですね。

ですから来年の６月、私はもう確実になるということで、例えばこの間ユネスコの世界遺産、1972 年にできたんですけれども、ちょうど今年 40 周年ですね。ですからそのためにユネスコの方が来られて、ユネスコのトップの事務長が来られて、その方とお目にかかって、きれいな名刺を渡して、富士山の赤富士と大きな波ですね、あれが一緒に見えるような、「ああ、これは何ですか」と、言うまでもなく静岡県の富士山の代表、377 万 6000 人、実際は 373 万なんですけれども、そういうので来たということで印象付けてきました。

この１月にもパリでユネスコのあるところですが、そこで富士山展をするということで、山梨県知事さんと一緒にまた参りまして、最後のプッシングをするというそういうことになっておりまして、意気込みはもう天よりも高くという感じですよ。それぐらいやっていますから、雲を突く勢いで、今年は辰年ですから、来年はヘビのごとく脱皮してちゃんとやるというので、もう富士山が今までの日本の財産から世界の、人類の共有財産になる年

だということでやっておりますから。

それから傍聴者３さん、いろいろとありがとうございました。御心配をかけました。私は当初は脱原発というふうに決めたとしても、廃炉ということは決めても、あそこに使用済み核燃料がございますでしょう。ですからこれどうするんですかと。これは今使用済み核燃料数千体あるんですよ。仮に動かすとするでしょう。動かすということはどういうことかということですね。実は燃料棒の入れ替えをしているということなんですよ。定期点検という言葉があるでしょう。13 カ月ごとに定期点検をすると。定期点検の名前で何しているかというと、そこから数百本の燃料体を出して、新しいものを入れるんです。その出したものをどこに置くかというと使用済み核燃料プールに入れるんですよ。そのプールの容量が 2,000 体余りなんです。

ところが１号機２号機というのがありまして、そこにちょっと傷物のものが１号機に１体あります。それから２号機には 1,000 体以上の使用済み核燃料があって、それをこれは耐震性が十分にない建物ですから、３号機、４号機、５号機に移さないといけない。そうすると残り 900 体余りしかもう余裕がないので、再起動しても、再起動というか、定期点検を１回やったら、もう今度は出したものを持っていき場がないという状態ですから、そういう状態なんですね。

だからといって、じゃ使用済み核燃料は安全かというとプルトニウムがあります。これは核兵器の材料になるもので、これをどう処理するかということを毎年ＩＡＥＡという国際原子力委員会に届けないと、日本はこれを人を殺傷するために使わないでエネルギー源としてだけ使うという、それを毎年できたプルトニウムというのはこういう形で再利用しますということを言っていたんですが、今はそれができない状態になっているんです。だから動かせる状態なんか全くありません。だから心配ないということだったんですね。にもかかわらず、そういうことを何度も言っていました。だから心配ないですよと。動くことはありませんということを申し上げていたんですが、十分に届かなくて、それで 16 万 5000 の方たちが出されてきました。

だからもうそこまで言われるなら、わかりました、やりましょうと。そういうことです。だって私も皆さんに選ばれた。そういう立場ですから、その方たちが直接請求で住民投票をやれとおっしゃっているのならやりましょうと。これはもうノーと言えるような、そういう筋のものじゃありません。

ところが出してこられて、初めて我々は条例について物が言えるのです。相談があれば

言いますよ。こちらが出せれば、初めから知事が出せばいいじゃないですか。直接請求というのは、条例案を皆さんがおつくりになって、そしてそれを見た途端にチェックしたら、29 条あるうち、直さなくていいのは２条だけでした。実際上、これは通っても実際上は条例を実施できないということで、どこに問題があるかということだけ意見を付さない。すぐにその日から調べて出したわけです。ここに問題がありますと。

ところがそれが問題ないとあなた方、代表がおっしゃったでしょう。これはもう標準形で使えるんだとおっしゃる。使えないというふうに言っているにもかかわらず使えるとおっしゃる。そしてそのまま結局原案は提出されました。そうするとやっぱり使えないとなります。

じゃ使えないのはどうしたら直せるかということで、県議の先生方が直してくださったんです。そしたら御承知のように、ものすごい隔たりがあるということになりまして、原案の方は使わないから、基本的に条例に賛成する人がやっていったとしても、この条例を通すわけにいかない。全員がこれは×印、つまり全員これを否決したんですね。修正案の方は、これは県会議員の先生方が決めたものでしょう。だから県会議員の先生方がそれに対してどうするかと思っていたんですが、おっしゃったとおり、これ自体が原案と余りに違うと。これを可決することは 16 万 5000 人の人たちが賛成した原案とは違うものだというそういう理由で否決されましたね。

それで、12 月に私に出せとおっしゃる。ともかく来年 12 月まではこれは動きません。まだ時間があります。それからもう１つ、大変残念なことですけれども、その代表の方が本当に 16 万 5000 人の方々の代表かどうかということについて疑念を持っていました。案の定、政治家になられるそうですね。

ですから署名者の名簿を利用されなければいいというふうに思っているんですけれども、さて、私はその修正案というのは、これは実行可能です。しかし今傍聴者３さんがおっしゃったように、これは県議会で議決したとすると、そうするとこれは投票をどうするかというと名簿が必要です。そしてまた投開票の事務が必要です。これは県はやったことがありません。これは普通の選挙と一緒で、全部市町にお願いをするわけですね。じゃ市町がノーと言ったらどうするといったら、この直接請求にかかわる住民投票に関しましては、これは強制力がないですね。

だから協力を頼むことはできますけれども、ある議会がノーと言えば、そこのところではそれで通っちゃうということがあるので、この間の全国知事会のときに、あえて総務大

臣に申し上げた、地方制度調査会でこの点が詰めが甘いと言われているので、一旦議決されたものは通すように変えてください。それだけじゃ不十分だと思って、今度は１対１でお目にかかりに行って、それで直接請求というものがあって、議会で議決された場合にはスムーズに県民投票ができるようにしてくださいと。そしたら彼はそこにいた参事官に「検討しろ」というふうに言っています。

だから私は今これをどうしたらいいか。必ずしも今すぐに 12 月とか、あるいは２月とかの議会のときにやるほど切羽詰まっていません。動きませんから。再来年も５号機がああいう状態ですから、動く可能性がちょっと低いと思います。

去年の夏乗り切ったでしょう。この間の冬乗り切ったでしょう。この夏乗り切ったでしょう。この冬乗り切るとしますね。さらに来年の夏乗り切ると、さらに来年の冬乗り切ったら、原発要るんですかという声が出てきませんかね。

そして 2009 年、まだ原発が割と元気にやっていたころです。あのころに日本には電力会社が 10 あります。そのうち沖縄は原発を持っていません。残り９つの電力会社は原発を持っているんです。ところが原発に対する依存率というのは違います。大飯原発を持っている関西電力の場合は原発依存率が 2009 年段階で５割なんですよ。四国電力も５割です。九州電力も５割なんですよ、あの玄海の原発を持っている、５割。そして中国電力が２割です。そしてこの事故を起こした東京電力は３割です。東北電力も３割です。北海道電力は４割です。中部電力は１割なんですよ。一番低いんです。ですから原発に最も依存していない電力会社なんですね。

それで５割も依存しているところだと、一気にゼロにしようと言ったら、もう電気が止まるというような心配があるので、そういう意見が出てきます。しかし本県はというか、中部電力は１割しか依存してないので、だから例えば太陽光使う、それで 10 年かけて２倍にしようといったのが、８年前倒しで今年できちゃいましたよ。だから地産地消で自然エネルギーを上げていくという方法も一つあります。

しかし私は一方で、こういう県議の先生方とともに直接民主主義と、自分たちの意見を直接言えるというそれがないといけなと思っているわけです。その制度が十分じゃないので、ともかく私はその環境づくりをすると。それからできれば、これは県議の方々がせっかく作った条例です、このいわゆる修正案というやつ。これはいわゆる額縁さえきっちりできれば、すなわち市町が自動的にそれは県民投票の事務をすると。名簿を作ったり、投開票の事務をなさっていただくことになれば、もう完璧にできますよ。

ですから皆様方も、私だけじゃなくて、県議の先生方にも、間接民主主義だけじゃなくて、皆様方も選ばれた人でしょう。みんなが言いたいと思っていることは、この原発の問題については国民的な、場合によっては今回の衆議院選挙の争点の一つでもありますから、これについては物を言わせろということで、あの修正案について今超党派で原発エネルギー問題について考えようということで、今月の末からそういう委員会が発足します。ですからそこにも働きかけてください。

私は基本的に、もう言明しておりますように、直接民主主義に道を開かんといけない、制度的な障壁はそれを取り除くために全力を尽くす、これは私の仕事です。しかしそれを通すのは県議会ですから、県議の先生が作った修正案があります。これは本当はもう原案が、そこに新しい修正案としての原案がありますから、これはこれなりにもうほぼ完璧です。ですからこれは使えるんです。それをベースにした形で動かれると、県民と議会と、それから私と役割分担しながら間接民主主義と直接民主主義が両輪相まって、静岡県がそういう方向へ新しい扉を開けることになるんじゃないかと期待しています。

＜知事まとめ＞

ともかく言いたいことをお互いに言い合うということはとても大事で、しかし今日はＢＧＭが流れていましたけれども、こういうお花とか、おいしいものをいただくとか、周りに美しい環境があるとかいうことは、一見何でもないことのようですけれども、誠にまれなることではないかと。

多くの東日本大震災でまだ仮住まいをされている方、仮設住宅にいらっしゃる方もいらっしゃいます。今イスラエルのガザ地区のように爆撃、あるいはシリアのように内乱状態というところがあります。そうした中で、音楽のことや、お花のことや、食のことや、街をきれいにすることや、そういうことを話されるのは本当に幸せなことだと思います。

しかし、これはもっとできる、まだやるべきことがある。そして今まで我々の方は何となく東京の外れ、あるいは名古屋、ないし関西の外れだと言われた。しかし新東名はこれから神奈川に延伸されていく、愛知県に延伸されていく、こちらから富士山のすそ野が東西に延びているように、東に延びていき、西に下りていく。東海道新時代、ここが真ん中になりつつあるということで、これからは東京に上るなんて言わないでください。

東京まで下っていく、西の方に下っていくというわけで、その昔、西から下って東に行った、東に下っていくと言われました。都落ちと言われた。江戸時代以降は、江戸東京か

ら離れていくことを下ると言ったわけですが、これからはここが中心になる。新東名の 162 キロは東に下っていく、西に下ると、ふじのくにのこれをハートランドということで、ふじのくには日本国ですから、見立て富士が北は北海道から南は沖縄まで 340 もあります。ですから日本は誠にふじのくにです。

別にそれは静岡県を否定することではありません。ここは伊豆だとか東部だとか、あるいは駿河だとか遠州だとかいう言葉も残っていますでしょう。三島という言葉も残っています。同時に静岡県という言葉も、これからも残っていくでしょう。ただ一方でふじのくにという言葉も使える、これは山梨県の方も使える、日本全体が使えるんです。

そういう本家本元として聖なる山をいただいて、そして美しい水を我々は生命の源として持っている地域ですから、ここから下界を清めていくぐらいのつもりで、ふじのくにの修身性を掲げ、特に玄関口である函南、三島の方々には、玄関でお迎えするときのたたずまいを町長、市長、ともに市民の代表とパートナーシップを組んでいただいて、これからも三島、函南が元気な美しい人を元気にするような、またそういう地域になりますことを今日は感じた２時間余りの時間でございました。本当に御協力いただきまして遅くまでありがとうございました。